
超人になれる本

海星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

超人になれる本

【Nコード】

N4307K

【作者名】

海星

【あらすじ】

本の好きな中学生、早瀬ルカは、ある日、怪しげな本屋を見つけ、そこできれいな模様の入った古い本を見つける。その本は、文字を浮き出してしゃべることができ、自分はクレバーだ。と名乗る。そして、「あなたに力を与える」という。すると、ルカは人の心が読めるようになった。

クレバーの頼みで、東京タワーへ行くと、そこには5人の仲間が。その仲間で、あるものを集めて行く。

この作品は休載になりました。すみません。

第1章 超人になれる本

わお。こんなところに本屋があつたなんて。

私の名前は早瀬ルカ。十四歳。本が大好きで、休日はいつも本屋へ行ったり、図書館へ行ったりしている。

今日は、はじめて、隣町の探索へ行つた。隣町は私の住んでいる町よりも都会で大きい本屋がたくさんあつたので感動して本を読んでいた。そして、門限まで一時間を切つたので、店から出てきた。その時、『珍しい本、あります』と書いてある、古ぼけた看板を見つけた。時間は気になるが、その看板にひかれてしまい、私は看板の指している矢印の方向へと進んだ。

そこで見つけた店。その店は、いままでに見たことのないほど古ぼけた店だった。普通の人なら、ここであつかりと肩を落とすところかもしれない。でも、私は違う。むしろ感動してしまった。

こんな古い店になら、今までに読んだことないような、おもしろい昔の本がたくさんあるかもしれない。そんな期待を胸に秘めて、扉を開いた。ちよつと古ぼけた障子をあけるような、雰囲気のある音がした。店番は一人。フードをかぶつたおばあさんだ。ちよつと怪しい感じがして、ぞくつとした。

さつそく、本を探し始めた。みんな、ほこりをかぶっているものばかりだった。店全体が日陰になつてたから本は日焼けをしていなかったが、しけつてしまふのではないかと思うぐらい手入れがされていない。しばらく本棚を眺めていると、ふと、一つの本の題名タイトルが目に入った。

「超人に……なれる本？」

私は首をかしげながらも、その本を手にとつてみた。

ずっしりと重みのある、古い本だ。私は、そつと、この本が壊れないかと思いながら、ページを開いた。

そしたら、凄い衝撃が来た。火花が散つた気がした。映像……花

畑が見えた。え、なに、死にかけたわけでもないし、天国なわけないか。

手元を見てみると……そこには大きな、まるい、模様の入った絵のようなものが描かれていた。そのほかには、何も書かれていなかった。なんだろう。なんか、ものすごく魅かれてしまう。この絵。

私は、更にページをめくってみた。真つ白だ。何も書かれていない……と思ったら、だんだんシミのように汚い、文字が出てきた『こんにちは。私の名は知恵クレバーです。私を見つけてくれたあなたに、力を与えます。そのうちに、どんな力かわかるでしょう。あと、私のことを買いなさい。きつと、あなたのためになります。』
そんなことが書かれていた。

別に、言われなくても買うつもりだった。絵を、気に入ってたのだ。それなのに……さらに文字が浮きでるだど!? こんなに凄いもの、見逃すわけにはいかなかった。

「すみません!! これください」

「ふふふ……まいどお」

怪しい店と、怪しいお婆さんを背にして、私は走り出した。なんだか、これからの生活が更に充実したものになりそうな予感がした。

次の日の朝。

目覚ましの音で、目が覚めた。寝たまま背伸びをして、隣の時計を見た。

「七時……五十五分!？」

遅刻の予感がする。というより、完全に遅刻だ。私は急いで教科書とノート、そして昨日買った本を入れ家を飛び出した。

門は閉まっていた。しょうがない。自転車は、木の陰にでも置いておこう。

「とりやつ」

私は、門を飛び越えた。というよりは、よじ登って落ちた。この門

は、結構登りやすい。手頃なところに足の置き場がある。

そのままダッシュで靴を履き替え、階段を上った。最初、鐘もなっていないしぎりぎり間に合ったと思った。だけど、廊下には人が1人もいない。これは……遅刻か!?

これほど、学校のドアの音を呪ったことは、今までに一度もない。私はできるだけそっと開けたのに、ドアは大きな音を出してしまった。その音で、一斉にクラスメイトが振り向いた。

その時だ

『委員長、遅刻だゝめずらしっ』

『へへ、ざまあ見る。いっつも俺を馬鹿にしてるからだ』

『ルカ大丈夫かな……担任、もうすぐ春休みだからって気を抜くな
ってこの頃うるさいし……』

『えっなに!?!』

思わず声をあげてしまった。自分でも、変だと思っ声だ。

『えっなに……だと!?! 遅刻しといて何言ってるんだ。おまえは
罰として、今日の大掃除、人気のなかったトイレ掃除を一人でやれ
!!!』

『まったく……早瀬は大丈夫だと思ってたが、まさかこいつまで……』

先生の声が、重なって聞こえた。さっきのも、確かに声がしたのに、みんな口が動いていなかった。

びっくりして、口を開いたまま呆然とたっていると、担任に

『なにあほ面で突っ立っているんだ!! 早く座れ』
と怒鳴られた。

「うつうつ……なんだよゴリ男おそんなに叱らなくなつていいじゃん……」
今、私はトイレ掃除をしている。トイレ掃除はもとも人気がないが、今日は更に人気がない。なんだって大掃除。いつもよりも念を入れてやらなくてはならないのだ。

「はははっ。遅刻したおまえがワリーんだよ!!」

「うつさいな!! 優希だって遅刻じゃん」

隣の男子トイレでは、私の幼馴染、鈴谷優希すずやゆうきが、私と同じ理由で掃除をしていた。

優希とは、幼稚園生のころからつるんでいる。髪は染めていないが、ピアスをつけていて、私としてはチャラチャラしたイメージなのだが、友達などのクラスメイトは「かっこいい」と騒いでいる。たしかに、服の着こなしはいいかもしれない。顔も……まあまあいいと思う。目はちょっとつってるが、二重だし、まつ毛も長い。

「でもさ、めずらしいな。おまえって無遅刻無欠席の優等生な委員長様じゃん」

「優希からみればそうかもしれないけど、私は普通なの!! 優希が異常なの!!」

「うつせえ!! 俺はちゃんと遅刻した理由があるんだよ」

「なにさ、言ってみなよ!!」

「寝坊した」

「ちゃんとした理由じゃないじゃん!!」

いつも優希とは、こんなバカっぽい会話をしている。それなりに楽しいのだが、たまにむかつく。

「でもさ、ルカだって寝坊だろ? ほんつとに珍しいな!! 何かやってたんか?」

そう。昨日私は、あの後夢中であの本を読んで……いや、「会話」していた。あの本は、話しかけると文字となって返事するのだ。私は、本が言っていた「力」とは何なのか、はかせようとしたが無駄だった。ただ、「そのうちにわかる」とだけ言っていた。もしかして……今日の、あのクラスメイトの声や、先生の声がそうなのかもしれない。

待ちに待った、昼休みが来た。私は急いで、本を持ち、だれにも見つからないように屋上へ行った。ここの屋上は立ち入り禁止なの

だが、実は鍵が壊れているのだ。私はここに、一人になりたいときによく来た。

「ねえ、クレバー。今日のあの声、聞いた？ あれって力に関係あるの？」

すると、文字が浮きでてきた。

『そう。あれが、私があなたに与える能力』

「何の能力なの？」

『簡単に言うと、人の心を読むことができる能力だ』

人の心をよむ！？ それって凄くない！！？

『実は、ルカに頼みたいことがある』

「何？」

『実は、今度の土曜、行つてほしいところがあるんだ』

行つてほしいところ？ なにか、面白いことがありそうな予感がする。それに、土曜は何も予定がないはずだ。

「いいよ。どこ？」

「東京タワーだ。そこに、私の仲間が集まる」

クレバーの仲間！？ なんだか面白いことになりそう。

集合。

待ちに待った、土曜日となった。

お母さんには、「友達の家で勉強会をする」と言っておいた。友達には口裏を合わせてもらってる。

かばんには、本と、なぜかクレバークレバーに持っていけと言われたナイフ、あとカメラとメモ帳とペン。そして絶対に必要な、財布を入れた。

クレバーには「夜の九時までにつけば十分」と言われたが、もし遅れたら大変だし、行きたい店もあったので、早めに一時に家を出た。

私の家は、千葉県にある。「街」と呼ぶには、ちょっと田んぼの多すぎる場所だ。でも、東京にはまあまあ近い。たしか、快速で約一時間じゃなかったっけ？でも快速は高いので、私は乗り継いでいくことにした。中学生のこづかいでは、それでも重い負担となる。

お昼の一時にしたのには、他にも理由がある。ぎりぎりにつけばいいや。なんて考えて家を出ると、ラッシュアワーで大変なことになってしまうからだ。前に、こけてしまってそのまま立ち上がれなかったこともあった。

東京には、三時についた。やっぱり時間があまったので、私は大型本屋へ行った。渋谷とか原宿とかで買い物する方が中学生の女の子らしいかもしれないが、友達と一緒に来てるわけではないし、東京には古本屋街で有名なところもあったので、そっちの方が気になった。

時間はあつと過ぎ、七時となった。私はマックで軽食をとり、東京タワーへと向かった。そして、展望台までいった。

昨日クレバーは、

『八時三〇分になると人がいなくなる』

と言っていた。あと、

『その時に残った五人が、私の仲間……いや、仲間を持つてる人たちだ』

とも言っていた。

だけど、私はそんなに気が長くはなかった。タワーについたのは八時一〇分。一人でくるにしては詰まんないところだし。私は暇つぶしになるようなものを持ってきてはいなかったし、クレバーとおしゃべりをするには、人が多すぎた。

だから、一人ひとり、そつと、タワーの中にいる人の顔をのぞいた。そして、驚いたことに幼馴染の優希を見つけた。

「ゆ、優希!？」

優希は、カメラで写真を撮つてるところだった。私の声に驚いたのか、フラッシュを、自分の顔に向けてやってしまった。そのせいで目がくらんだのか、転んで、近くにいたカップルの間に割りいってしまった。

「なにすんだよ、ああ!？」

「す、すみません……」

優希は情けない声を出しながら、あわてて起き上がり、腰をかめたまま私のほうへ近づいてきた。

「な、なんでお前がここにいるんだよ？ 友達と来たのか？」

私は笑いながら、

「東京タワーは友達と来るような場所じゃあないでしょ？」
といった。

「・・・そんなに笑うなよ・・・」

「はははっごめんごめん!! てか、それは私のセリフだよ。なんでこんなところにいるの？」

「えっと……待ち合わせ!! てかおまえは!!？」

「うん。私も待ち合わせ!!」

そう話してるうちに、ふと、優希のしているリストバンドが目に入った。

「ねえ……そのリストバンド、買ったの？」

「え……あ、ああ、そうだよ。この間、買ったんだ」

「ふうん……」

なぜか、私は優希のしているリストバンドが気になってしょうがなかった。

八時二九分になった。だいぶ周りの人は減ってきて、残ってるのは私と優希を合わせて一〇人となった。

「ねえ、なんでまだいるのさ」

「は、まだ待ち合わせの人が来てないからだよ！！」

ちよつと、イライラしてきた。さっきまでいた人たちも、だんだんと出て行って、今では六人しかない。

私の携帯が鳴った。アラームを、設定していたのだ。びっくりしてあたりを見回すと、全員で五人になっていた。

「え……どういうこと！？」

驚いてる私に、周りの人たちが近づいてきた。

「こんばんは。もしかしてあなたは、こういう模様の入った物を持っていますか」

そう言っで見せてきたのは、一つの懐中時計だった。ふたに、あの絵が描いてある。

「え、あはい。持っています」

私はそう言っ。かばんの中から本を取り出した。

「えっ、ちょ、なんでルカがそれ持つてるんだよ！！？」

優希が、そう言ってきた。

「そついう優希も、なんでまだいるの？」

「俺も、持つてるんだよ。模様の入ったやつ！！」

そう言っ、優希はリストバンドを見せてきた。たしかに、絵が刺繍になって入っっていた。

「え、ええ！？」

私は、悲鳴のようにも聞こえる大声を出した。他の4人が、さらに

不思議な顔をして近づいてくる。

「どうしたの？ なにかあった？」

1人の、きれいな髪をしたお姉さんが聞いてきた。すると、さつき私に話しかけてきた懷中時計を持っているお兄さんが、お姉さんに説明した。

「へー、すごいわね、それって。」

お姉さんは、目を光らせて私と優希を見た。

「やっぱりそれって、赤い……」

「はい、じゃあまず自己紹介からしようか。」

お姉さんの話を遮って、懷中時計の人が話を進めようとした。おお、このお兄さん結構頼りになりそう。

「じゃあ、まずは自己紹介をしようか。」

「俺の名前は、速水茂。はやみねとむ 今、一九歳だ。」

そう最初に言ったのは、首から、紫色のきれいな、あの模様の入った長いネックレスをかけている、身長の高いお兄さんだった。髪を茶色に染めている。ちよつとかつこいいなと思った。

「私の名前は、田野口未来。たのぐちみらい 今ちょうど二〇歳。」

次に、さつき話しかけてきたお姉さんが言った。このお姉さん、見た目ふんわりしていてかわいいんだけど、性格結構強そうな気がする。口調が、けっこうはきはきしてるのだ。

「えっと、僕の名前は桜木賢人。さくらぎけんと 今、一六歳」

これは、あの懷中時計のお兄さんだ。メガネをかけている。髪が薄茶で、話しかけやすそうな雰囲気漂っている。

「俺の名前は、鈴谷優希。今、一四歳」

「私は、早瀬ルカ。同じく一四歳」

私も優希も、自己紹介をした。そして、あれ、と思った。

「あれ……これだけです？ 全員で六人って聞いたんですけど。」
速水さん、田野口さん、桜木さん、そして優希と私。これだと、一人足りない。

「あれ、ほんとだ」

私もみんなも、あたりを見回した。そして、一人を除いて、もう一人を見つけることができた。

「ちょ……速水さん、背中……」

なんと、速水さんの背中に、金髪の女の子がしがみついていた。それなのに、速水さんは全く気付かなかった。速水さんは、びっくりして背中に手をまわした。そして、女の子をつかみ、そのまま床へおろした。女の子は寝ていたらしく、目をしばさせている。青い目だ。とてもちっちゃい。一〇〇センチいってるかいってないくらいだ。服のそでに、透明な、模様の入ったブローチを付けていた。

「お名前は？」

桜木さんが、女の子に話しかけた。

「藤野エミリです」

女の子は、目をしばしばさせながら答えた。その動作が、とてもかわいい。

自己紹介が終わったので、次の段階へ入ろうとした。

集合（後書き）

今回でやっと、仲間をそろえることができました。相変わらず文章能力が低くて面白くないかもしれませんが、感想を書いていただければ嬉しいです。

6人の妖精

次の段階へ入ろうとした・・・次の段階って何？

そう思った時、本が白く光った。^{クレバー}なんだろうと思い、ページを開いてみる。

『では、全員そろったので儀式に入りたいと思います。』

クレバーはそう言い、いや文字にだした。

『もうすぐ月が出ます。月が出たら、その光が模様に当たるようにおいてください。そして、ナイフで切り、少しでいいので血を模様の真ん中にある丸い所に垂らしてください。』

クレバーの言ってること、正直言っただけがわからない。儀式？なにそれ・・・

「おい、何やってるんだよ。」

優希に話しかけられた。そうだ、私は今、ただ本を読んでいるようにしか見えないのだ。

「えつとね・・・クレバーが、これから儀式をするって・・・。」
そう言った途端、みんなが「えつ」と叫んだ。何か変なこと言ったかな？

「えつと・・・早瀬さん、その本しゃべるの？」

桜木さんが、そう言ってきた。

「え、だってみんな同じでしょ？」

「いえ。私のは、しゃべんないわ。」

田野口さんがそう言った。

「え、つででも、だったらなんでみんなここに来たの？」

私は、クレバーに頼みごとがあるといわれてきた。みんなも、似たような方法を使って頼まれ、来たのかと思っていた。

「俺はこれを買ったときについてきた紙を読んできただけだぜ」

その時、クレバーがまた光りはじめた。私はあわてて、またページを開く。

『自分の意思をそのまま伝えることができるのは、私だけ。私の能力が、そうだから。』

能力……。能力って、心を読むこと？でもそれだけじゃできないんじゃない……

『私の正しい能力名は、テレパシー意思疎通。心を読むだけでなく、相手に意思をしゃべらずに伝えることができる。文字として伝えることもできるし、映像として伝えることもできる。私は、白い本に文字が浮き上がってるように見せているだけ。ただ、私の仲間とその持ち主の心を読むことはなぜかできない』

知らなかった。クレバーがそんなにたくさんの力を持っているなんて……そして、その力を私が使えるようになるなんて。

「じゃあ、あそこに置こうか」

桜木さんが、そう言いながら雲に隠れている月が見える場所へと歩いて行き本を置いた。なるほど、うつすらと月の光が当たっている。みんなで並べて、本を置いた。そして私は、ナイフをかばんの中から出した。買ったばかりの、柄のかわいい果物ナイフ。これを、まさか自分の血を出すために使うことになるとは。うまくやれる自信がない。

「じゃあ、一斉にやろうか」

皆もかばんの中からナイフを取り出していた。そして、それぞれ痛くなさそうなところを選んで、ナイフを当てた。私もおそろのおそろナイフを指に当てた。軽く押してみる。さすが買ったばかりのナイフ。すぐに切れた。その時ちょうど、雲から月が出てきた。指からは血があふれ出ている。皆、それぞれの模様の丸い所の上に指を持っていた。そして、血を垂らした。

模様が輝きだした。丸い所は特に明るく、銀色だ。その周りにある6つの区切られた絵もそれぞれ違う色で、輝き始めた。そう言えば、きれいきれいと思いいながらこの模様をまじまじと見たことはなかった。真ん中に丸。そしてその周りに、6つに区切られた…植

物？花とかが描かれている。1つは、何の花かすぐにわかった。小さいころ、お母さんが見せてくれた写真に写っていた、きれいなサルビア。

キーーーーーー……

ものすごい音がしたかと思うと、周りが真っ白になった。目をあけることができない。

それから何秒……いや、何分たったのだろう。誰かに、肩を叩かれた。とても小さな手。エミリちゃんかな？でも、小さすぎない？

「こんにちは。クレバーです」

耳元でしゃべられた。そっか、クレバーまだ語ってるのか。って、あれ？私、今目をつぶってるよね？

「早く目を開けるー！！」

バツチーン。ほっぺたを思いっきり叩かれた。びっくりして目を開いた。

そこにいたのは……妖精？手のひらサイズの、小さな三頭身の人間。服が、昔見た錬金術師の格好にそっくりだ。肩にマントをはおっている。髪が赤茶色だ。ポニーテールが丸っこい頭の上で元気にはなえている。

「く、クレバー……？え、幻覚？」

目の前にいるのは、人型だけどどう考えたって人ではない。

「う、うわっ！！イキナリ何すんだ」

隣から、優希の声がした。びっくりして振り返ったら、優希の眼の前にも、三頭身の小さな、RPGにでも出てきそうな服装をした、髪が紫っぽいものが見えた。

「初対面のやつに蹴りいれるなんて非常識じゃないの、おまえ」
いや優希、つつこむとこそ違っ。

まわりを見回すと似たような三頭身の人間のようなものが優希と私の他に、4人いた。

「え、ちよっと、おまえらなんだよ！？」

速水さんが、後ずさりしながら叫んだ。皆も、不気味そうに見ている。ただ一人、エミリだけが、興味深々に捕まえて眺めていた。

私と優希の近くにいた二人の他に、三頭身の生き物は四人いた。速水さんのすぐそばには、魔法使いみたいな服と帽子を着た白い髪の毛の女の子。田野口さんの近くには、ふんわりとしたドレスで冠をかぶっており服も髪も同じピンクの女の子。桜木さんの近くには、金髪の、王子様のような格好をした男の子。エミリのそばには、白衣を着た、銀髪の男の子。みんな人型だけど、人とは思えないほど小さい。

「えっと、混乱してると思うので説明しようと思う。私たちは、昔のヨーロッパで作られた、力をコントロールする者だ。全員で六人。私は知恵、白い髪のは幻、ピンクのは恋、金髪は真実、銀髪は治癒、紫は騎士。その模様には、私たちの力を示す植物、私ならサルビア、ビジョンは梨、ラブは薔薇、トゥルーはマーガレット、ヒールはピワ、ライダーはトリカブトが描かれている。」

長ったらしい説明が始まった。でも、終わりは簡潔だった。

「私たちは、人の役に立つために作られた。私たちはあなたがた六名に、力を与えたいと思う。」

おもしろい。と思ったが、少し怪しい気もしてきた。

6人の妖精（後書き）

アドバイスの内容に気をつけながら、書きました。感想を書いてくださると嬉しいです。

第2章 6つの力と石

目覚まし時計の音がする。朝だ。私は顔をあげ、土曜日に起きたことが本当か確かめるべくあたりを見回した。いた。クレバーが、私の足のところらへんで丸まって寝ている。

それもそのはず、今日は月曜日だ。昨日も同じ動作をして、クレバーの姿を確認している。ちなみに昨日はクレバーと一緒に図書館へ行った。クレバーはなんだか難しい本ばかり読んでいたが、それでも本の好きな友達ができたようであれしかった。私に友達がいるが、皆本はあまり好きではない。一緒に遊びに行く場所は、本屋や図書館などではなく、カラオケやプリクラやゲーセンだ。もちろんカラオケもゲーセンも楽しいのだが、私は本を読むほうが何倍も楽しいと思う。

「おはようルカ」

「おはよ」

学校に着いたのは、HRの三〇分前。かなり余裕だ。

桜が少し咲いてきている。私は写真でも撮ろうとかばんを開けた。そして、重大なことに気がついた。

「ク、クレバー！？　なんで学校にきてるの」

クレバーが私のかばんの中に忍び込んでいたのだ。

「ああ、私もこの学校に来ようと思ってな」

クレバーは、姿を消すことができない。それは昨日知ったことだ。私が読んだことのある小説では、姿は主人にしか見えないという設定が多かったから、当然クレバーも消すことができると思ってたのだ。なのに、返事は「できない」。昨日は結局、かばんの中から顔だけ出してクレバーは本を読んでいた。

学校には、当たり前だが人がいっぱいいる。もしも、姿の消すことのできないクレバーが見つかってしまったら、どう説明すればい

いのかわからない。

「あ、ルカ、今どう説明すればいいのだろうとでも考えていただろう。クレバーが指摘してきた。仲間とその持ち主の心は読めないというのは本当なのか、疑いたくなる。」

「まあ心配するな。そのうちわかる」

私が机で本を読んでいると、私と同じ学級委員の小林君が話しかけてきた。

「早瀬、今日昼休みに生徒総会があるぞ」

げ、忘れていた。もうすぐ春休みだし、きっと内容は反省会だろう。何を言うか考えておかなくては。

こう見えても私は、この風香中学校の学級委員長だ。ちなみに、立候補ではなく推薦。全校生徒に押しつけられたようなものだ。しかも、その理由が「いつも本を読んでいてまじめそうだから」。そんないい加減な理由で決めてほしくない。もちろん、私もやる気がない。

他の学校ではそれぞれのクラスに学級委員長がいるそうだが、この学校の学級委員は、生活委員、図書委員等と同じ仕組みになっている。つまり、学級委員長は学校で一人だけ。あとはそれぞれのクラスで二人ずつ学級委員になり、学級委員会のメンバーとなる。二人のうちどちらがリーダーとかは決めない。クラスで決めることも、整列も、代表の反省も、二人で平等に分けてやる。学級委員のリーダーは、学級委員長と副委員長の二人だけだ。その分、仕事も多い。

「席に着けー」

総会で何を言おうと考えていたら、ゴリ男が教室に入ってきた。ゴリ男というのは、見た目がゴリラっぽいからという単純な理由から来ただけではない。名前が『五郎』なのだ。ゴリ男がこの学校に来たときにやった集会の自己紹介で、校長が舌を嚙んで「ゴリ才先生」と呼んでしまった。見た目と語呂の良さを全校生徒が気に入る、次

の日から皆「ゴリ男」と呼ぶようになった。

「春休みまであと一週間をきったこの時期に、なんと転入生が二人も来たぞ〜」

教室が、急に騒がしくなる。二人。なんだか、凄い覚えのある気がする。

「二人とも、海外からの留学生だ。入ってこい」

ドアから、物凄く見たことのある気がする二人が入ってきた。男子の方は、髪が紫色だ。女の子の方は…赤茶色のポニーテール。だれだっけ？ ついさつきまで、一緒にいたような…

「イギリスから来た、クレバー・ワイズです」

「同じくイギリスから来た、ライダー・ナイトです」

思わず突っ込みを入れたく名前。じゃなくて、クレバー！？ クレバーが、制服を着て…大きくなってる！？

「は！？」

いけない、心の叫びが出てしまったのか。と思ったら、その声の主は優希だった。軽く腰を浮かせ、ライダーを指さし、口をパクパクさせている。ゴリ男がそんな優希を見て、ぶっとい眉毛の間に3本ぐらい皺をよせた。

「おい、鈴谷なにHR中に立ってるんだ。さつさと座れ。あと、人を指さすんじゃない」

いつもよりも静かだ。もしかして、転入生の好感を得ようとしてるのかな？

「あゝ先生、彼は僕のチャット友達なんですよ。驚かそうと思ってライダーが、優希のことをかばった。思ってたよりもいいやつっぽい。そう言えば、声聞くの初めてだな。声の高さは…アルトぐらいか。若々しい。って、私はおばあちゃんか！？

「そおか、まあいい。クレバーさんの席は早瀬の後ろ、ライダー君の席は鈴谷の前だ。二人とも、手挙げて」

私は、手をあげた。なんて都合のいい席なのだろう。ていうか、「クレバーさん、ライダーさん」って、なに二人とも名前で呼んでる

の。もしかして外国名の順序を知らないのか？

「なんでクレバーとライダーが学校に通えてるのよ。あなたたちって、国籍あるの！？」

私は昼休みに、クレバー、ライダー、優希の三人を引きずって屋上へ行った。ちなみに、生徒総会はいつも昼休み終了一五分前には終わる。

「国籍はありませんよ」

「だって俺ら作られたもんだぜ？」

クレバーとライダーが答えた。キョトンとしている。

「じゃあ、なんで学校に通えてるのよ。身分証明書は！？」

「そんなもん、力がなんとかしてくれるし」

そういえば、クレバーたちには謎の力が多い。そういえば、クレバーの意思疎通テレパシー以外の六つの力ってなんだろう。その力が使われているのかも。

第2章 6つの力と石（後書き）

第2章へ入りました。第1章では設定ばかり書いてましたが、やっと詳しい話に入っていきます。

題名の通り、第2章では6つの力と、新しく出てくるキーワードの「石」が重要になってきます。

春休み中の仕事

クレバーとライダーが風香中学校に転入してきてから、学校では二人の噂が大量に流れた。

クレバーは、クールでかっこいい女子として、女子の中でも男子の中でも人気が出てきたそうだ。それに、クレバーは頭が良い。もう学年末テストも終わっちゃったのではつきりとはわからないが、すべての教科の授業で一番に問題を解き、先生を驚かしていた。

ライダーも、人気が出てきている。紫の頭は少し変な気もするが、まあ顔はいいんじゃないかと私も思う。それに、ライダーは勉強はできなかったが、体育で大活躍した。春休みまでの一週間の間に体育は三回あった。最初の陸上では学校の最速記録を更新し、サッカーではライダーのいるチームが二〇対一で勝ち、最後の野球ではホームランを何回も打っていた。きっと新学期の部活決めのときには、運動系の部活の勧誘に追われるだろう。

そして一週間たち、修了式がきた。

「通知表を配るぞ」

ゴリ男が赤茶色のカバーの通知表の山を持ってきて言った。

私の今回の成績はまあまあよかった。五が七つと、三と四が一つずつ。合計は、四十二だ。

「うわっ、さすが委員長」

いつの間に机まで来ていたのだろう。優希がすぐそばにいた。私の通知表を覗いている。

「ちょ、勝手に見ないでよ」

私は通知表を閉じた。良くても悪くても、通知表だけは他の人に見られたくない。先生のコメント欄は特に。

私は仕返しもしてやろうと思い、優希の通知表を取り上げた。優希が小さい叫び声を出す。

「どれどれ……なにこれ」

優希はいつも遅刻しているし、テストの点は悪いので、成績は悪いとは思っていた。思ってたはいたけど……

「一、一、二、一、三……なにこれ、五は体育だけ!？」

なんと、優希の成績は一が三つ、二が四つ、三が一つ、五が一つの合計一九しかなかった。

「ちょ、優希、進学できるの!？ 受験できる高校、あるの!？」

私と優希は来年で中三になる、中三といえば受験。私は親や先生に「評価で二を一つでもとったら公立高校はまず無理だからな」

と言われ続けていた。なので私は常日頃気をつけ、二をとらないようにしてきた。三も、毎回一教科しかとってない。その教科は体育だから優希の体育五は羨ましく思うが、優希の成績は体育しか能がないと言っても過言ではないと思える。

「え、ルカってば考えすぎだつて。頭堅すぎ。一つぐらいあるだろ。進学だつて、中学は義務教育だから大丈夫だつて」

確かに私は頭が堅いと自覚している。考え方が狭い気もしている。でも優希はお気楽過ぎないか!？

もしかして、推薦枠を狙ってるのかもしれないと思った。ライダーが来てから首位の座はとられているが、優希は体育の元全校一位だ。この間更新された学校内最速記録も、前までは優希のものだった。たしか優希は、バスケット部に入っていたはずだ。

「うわっ、ルカにライバルができたぞ!！」

私が考え込んでいたら、優希がまた叫んだ。手には、私の中でも優希でもない通知表を持っている。クレバーのだ。たしかにクレバーは勉強が物凄くできていたし、授業に積極的に参加していた。

「五、五、五、……ま、負けた」

クレバーの成績は、五が八つと三が一つだ。合計四三。一点違いで負けた。

「ク、クレバーは入ってきたばかりなのに……」

先生のコメント欄も、褒め言葉ばかり並んでいた。

「ええっ、クレバーそんなにいい点取ってたの!？」

後ろからまた叫び声が聞こえて、振り向いてみると……そこにはライダーが自分の通知表を持って突っ立っていた。

「ちょっとライダー、見せて」

私はライダーの通知表を奪い取って見た。一、一、二、一……合計十八。一点違いで優希に負けている。

「あ、やったね。俺より下の成績のやつ、始めてみたよ」

優希にもライバル出現ということか。それにしても、似た者同士の組み合わせになっているな。

帰り道。私はクレバーと優希とライダーと一緒に帰ることにした。クレバーが、この後仲間ではなすことがあると言ったのだ。

家についてから、二階へと上がった。親はまだ帰っていない。両親共働きなのだ。

「ルカの家に来るのも久しぶりだなー」

後ろで優希が叫んでいる。そういえば、優希とは幼稚園のぐらいのころはよく一緒に遊んでいた。お絵かきしたり、積み木をしたり、公園へ行ったり……今ではありえないが。

二階の私の部屋の前に来ると、私の部屋の中から話し声が聞こえた。

「へえー、本がいっぱいあるね」

「でも化粧用具が少なすぎるわ。色気がなさすぎよ」

は？　と思つて、ドアを開けた。

そこには、クレバーの仲間と持ち主が全員そろっていた。

「な、なんで私の部屋に皆いるのよ!？」

私がそう叫ぶと、クレバーが冷静に答えた。

「今日はこれから、春休み中に皆にやってほしいことを伝える」

春休み中の仕事（後書き）

今回は、ライダーとクレバーを入れた学校の様子を中心に書いてみました。

次回から、次のアイテムが登場してきます。

6つの石

私は、少し疑問に思っていたことがあった。クレバーたちは、何で私たちに力を与えるのだらう。気まぐれにしてはクレバーたちのメリットがなさ過ぎる。私たちとの生活を楽しむため？ それだけなら、別に力を与えなくても学校に入るだけですむ。もしかして、人間の体になるための儀式をするため？ そうだとしても、仲間の持ち主同士を合わせる必要は別にはないのではないか。本を月の光に当てて血を垂らすだけなんだし。いや、もしかして全員いないとできないのかもしれない。でも、自己紹介をする必要はなかったのではないか。

でもその疑問は解決された。さっきクレバーは確かに「春休み中やってほしいことがある」と言っていた。たぶんそれは、クレバーたちだけではできないことなのである。クレバーたちは、ちゃんと目的を持って行動していたのだ。

「やってほしいことは6つの石を集めることだ。全部居場所はわかってるし、力さえ使えば別に危険なことでもない。もちろんバイト代は出す」

クレバーは一生懸命たのんでいる。別に土下座させられたわけでもないがそう思った。しゃべり方が珍しく堂々としていないで、まるで急に教壇の前でスピーチさせられている生徒みたいになっている。「私は別にいいわよ」

田野口さんが、急にそういった。さっきまで暗い顔をしていたクレバーたちの顔が急に明るくなる。

「別に春休みは何も予定なかったしね。友達を誘って出かけようと思ってたけど、お金がなかったんだもの。ところでそのバイト代はいくらなの？」

なるほど、つまりお金がほしいと言うことか。みんながあきれたと言いだしそうな顔をした。速水さんなんか、ため息までついている。

「もしすべての仕事が終われば一〇〇万円差し上げます。もし途中でリタイアなされる場合も、五万は差し上げます。もちろん一人ずつにです」

めずらしくトゥルーが答えた。みんなで一斉に驚く。

「はあ！？ 石を集めるだけで一〇〇万！？」

優希が叫んだ。声が裏返っている。

「すべての仕事と言うのは石集めだけではないのだが、お金は確かに与える」

どれだけ金持ちなのだ、クレバーは。もしかして偽札なんじゃないのか？

「もちろん、本物の紙幣だ」

またもやクレバーが私の心を読んだかのように答えた。

結局、石集めには全員参加することになった。私は「受験生なので」と断ろうとしたのだが、そう言おうとしたところにはもうみんなやるときめていて、断りづらくなっていた。

「集めてほしいものは、ラピスラズリ、ヒーリング、ファントム、アメジスト、エメラルド、ルチルの六つです。でも集めると言ってもそこらへんのを買えばいいのではなく、私の言った場所からとってきてほしいのです」

全部天然石だ。まあ確かに買うとせっかくのバイト代も一気になくなってしまうようなものばかりだ。これはとってくるしかないだろう。……あれ、取って？ 採って？ 撮って？ 捕って？ ……もしかして、盗って！？

「まず最初にとってほしいものはラピスラズリです。これは、五井の橘婦人の家にあります」

まさかこれは……盗ってか！？ 私の悪い予感当たってしまったのか！？ ふと周りを見てみると、みんなも気がついてらしく固まっていた。ああ、私は犯罪者になるのか……。涙が出てきそうだ。

「ラピスラズリを手に入れるのに必要な力の持ち主は、主に知恵とクレバー

幻と治癒の三人です。明日早速行きたいので、力をうまく操る練習でもしといてください」

ああ、もう日数まで決まっていたのか……ん？泥棒なら名前に治癒はいらないんじゃないのか？

私は皆が帰っていつてから力の練習といつて色々させられた。町に出て通行人は何を考えているか当てるのから始まり、最後には鉛筆が何を考えているのか当てるところまでやらされた。

最初はかなり簡単だったのに、最後のは二時間もかかるほど難しかった。

クレバーが言うに、これは自分の常識をうまく整理できればできるようになるのだそうだ。『人間は何か考えている』とわかってるので人間の考えていることはすぐにわかるのだが、『鉛筆は生きていない』と思い込んでいるので鉛筆の考えがすぐにわからないのだそうだ。

私は「鉛筆は生命活動を行っていないので生きているわけがない」と何回も反論していたが、クレバーに「生きていると言うのは正しくは生命活動を行っているかではなく、魂が張り付いているかどうかだ」と何回も言われ最後には納得してしまった。理解できていないけど。

そして納得したとたん、私の鉛筆はしゃべり始めた。

『ルカってば中学生になってからシャーペンばかりつかっちゃって私を使ってくれないわ』

と繰り返していった。今度から鉛筆もたまには使うかと思った。そして、それからさらに大変だった。

鉛筆の声を聞いたのは夜の十二時なのだが、一度聞こえはじめると布団や枕、椅子や写真たてまで話し始めたのだ。寝たくても寝られない。そして結局、声を聞くターゲットを絞る練習までしてから寝た。結局寝られたのは三時になってからだった。

6つの石（後書き）

今回は少し短くなってしまいました。

次回からやっと思疎通以外の力も出てきます！！うまく書けるか心配です。

よかったら、評価、感想などを書いてくださるとうれしいです。

初仕事

集合時間は朝の十時。待ち合わせ場所は五井駅。私と優希は、家から一番近い駅で待ち合わせをして目的地へと向かった。ちなみにクレバーとライダーは下見などがあるので先に出かけている。

「ちよつと早すぎたかな？」

二人が五井駅についたのは、朝の九時だった。五井はデパートなどがまあまあたくさんあるところなので休日に入ったばかりのこの町は朝の九時なのに少し混んでいる。

私たちのそばを子供づれの親子が風船をもらって笑い合いながら通り過ぎて行った。その先で、初々しいカップルが並んで椅子に座りクレープを食べている。

きつとそのうち「クリームが付いているよ」とどちらかが言つてクリームをとるといってお約束をやるのだろうか。あれ……もしかして本やマンガの読みすぎ？

私と優希は、とりあえず近くのベンチに座った。

「……ルカ、やっぱりいくらなんでも出発時間が早すぎたんじゃねえの？」

優希はちよつと怒ったような顔で言った。眉間にしわが寄っている。

「だって……優希がまた遅刻すると思つたんだもん」

優希は今日ちよつと不機嫌だ。

それもそのはず、今日の待ち合わせ、私は時間を大幅に見積もつて決めた。優希がいつも学校に遅刻しているし、きつと遅れてくるだろうと思つたのだ。

しかし、優希は遅刻してくるところか私よりも速く来ていた。私は驚き、優希に待ち合わせの時間についてのことを説明したら、優希に

「俺は学校には遅刻するけど友達との約束に遅れたことはないんだぜ!？」

と怒鳴られてしまった。

でも、それなら学校にもちゃんとくればいいのに……

気まずい雰囲気のままベンチに座っていると、私のおなかになつてしまった。私は優希を待つ間にマックでも朝食を買って食べようと思っていたので結局朝食を食べられなかったのだ。

私は、自分の顔が今真っ赤になっていることに気付いた。やばい、優希に笑われると思って、急いでそっぽを向く。

……あれ？ なんも反応しないな。と思って優希のほうを見たら、優希は必死におなかと口を押さえながら笑うのを我慢していた。肩が揺れて、顔は真っ赤に上気している。

「……わ、笑うことないじゃん」

その優希の様子に気づいたら、私は恥ずかしくなつて更に真っ赤になり、なぜか涙が出そうになつてきてしまった。

「ご、ごめんごめん……クレープ屋かマックかに行く？」

優希は私の顔に気付いたのかわからないが、ちょっと焦っている。私はそんな優希を見ていたら自分も笑えて来た。なんで優希相手に恥ずかしくなつたのだらう。いつもどおりに、気軽にいればいいのではないか。

ちなみに、優希とはクレープを食べたが「クリームが付いているよ」というお約束は1度もなかった。

クレープを食べ終わったらちょうど十時十分前だった。待ち合わせ場所に向かったら、桜木さんとエミリちゃんかが椅子に座って待っていた。来てないのは、速水さんと田野口さんだけだった。

「おはよう」

桜木さんが私たちに一番に気がついて、にっこりと笑い手を振ってくれた。ベンチに座って携帯をいじっていたエミリちゃんもわたしたちのほうを見た。この頃子供に携帯を持たず親が増えていると聞くが、早すぎではないかと思う。

「おはようございます」

私と優希は挨拶をして、エミリちゃんの座っているペンチの後ろに立った。

「いよいよですね……」

優希がそんなことを言いながら苦笑いをした。桜木さんも困ったように眉を寄せたまま笑う。

「まさか、こんなことになるとは思わなかったよ」

「でも、やりたくなければ参加しなければいいんじゃないんですか？」

私は思っていたことを桜木さんに聞いた。田野口さんも速水さんもお金がほしそうだということは目に見えて分かったが、桜木さんはむしろ困っているような顔をしていたのだ。

「うん。でも、僕は今バイトで生活してるから百万円っていうのは魅力的だったんだよね」

桜木さんはそういいながらも目を泳がせた。まだ迷いがあるようだ。

「ごめーん！ 遅くなっちゃって」

田野口さんと速水さんはほぼ同時に来た。待ち合わせより10分遅れている。

「ふう、やっと全員そろったようだな」

急に後ろから聞き覚えのある声がしたので、びっくりして振り返った。するとそこにはクレバーたち六人がそろっていた。

「い、いつの間に来てたの!？」

クレバーは私たちを見て微笑し、話を続けた。

「さあ、一つ目の石を手に入れに行こうか」

初仕事（後書き）

こんにちは。海星です。

超人になれる本も7話まで行きました。

いつも感想ありがとうございます。今回はこの場を借りて説明しておきたいことがあります。

いただいた感想のなかに、「書かれている批評について直したほうがいい」というのがよくあります。

でも、私としては直しているつもりなのです。たぶん私の能力不足のせいです。

もし、せっかく批評を書いたのに直されてないと不満になった方がいらっしやったらすみませんでした。

もし誤字についての指摘を直してなかったら、見逃してるのかもしれないです。

あと、私の文章が一人称なのは、この話には恋愛要素を入れるつもりなので一人称のほうがいいと思ったからです。もしかしたら途中で三人称も使うかもしれませんが（ル力がいない時などで）。

あともう1つお知らせです。

私は今年受験があり、忙しくなってきたので更新が遅くなります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4307k/>

超人になれる本

2011年10月6日23時20分発行